

小学校・中学校の家庭科の興味深さと必要性に関する研究

その1

A Study of the Depth of Interest and Necessity of Home Economics

Education for Elementary and Junior High School Students, Part I

千森 督子 東口 依未

Tokuko Chimori Emi Higashiguchi

要 約

家庭科は生活に関連した幅広い内容から成り、将来にわたり必要な知識・技術を得ることができる大切な教科である。しかし、児童、生徒にとって興味深い教科かという点、必ずしもそうとは言えない。そこで、本稿は学習の基礎となる小・中学校での家庭科の興味深さと教科の必要性を検討する。その結果、興味に関しては「どちらともいえない」が半数を占めるものの、「興味深かった」が「興味深くなかった」よりやや多い結果を得た。学習内容では実習の方が座学よりも実用性も加わり、興味深い傾向にある。教師の指導力や生徒との関係性も興味に影響している。大半の短大生は小・中学校の家庭科の学習の必要性を認識している。

はじめに

家庭科は、衣食住、家族関係、消費生活、環境など、生活に関連した幅広い内容から成る。家庭科では、これらの内容を座学だけでなく、実習や実験などの体験学習を取り交ぜながら学ぶ。知識と技術を含む総合的な学習成果を獲得し、自らの生活に役立て、生活に生起する課題に主体的かつ実践的に対応できる力を身につけることを目標としている¹⁾。

そのために、家庭科は生活に直結し、将来にわたって必要な知識・技術を得ることができる教科である。しかし、児童、生徒にとって興味深い教科であるかという点、必ずしもそうとは言えない実状にあると考えられる。

本稿では学習の基礎となる、小学校と中学校の義務教育における家庭科に関する興味深さと家庭科の必要性を検討する。学んでいる最中の児童・生徒では客観視することが困難と思われるために、義務教育で家庭科を学んでから数年経、主体性が増し、生活力が身に付いてきている大学生の記憶や意識から当時を振り返り捉える。このような視点から小学校・中学

校の家庭科の興味深さや必要性を検証した先行研究は見いだせない²⁾。

そこで、本稿では、大学生は当時家庭科に興味を抱いていたのか、また、どの領域に興味を抱いていたのか、学んだことをどの程度記憶しているのか、現在、家庭科教育の必要性をどのように認識しているのかを明らかにする。

方法

研究方法は、質問紙法を用いた調査結果から考察する手法をとる。

対象の大学生は、とりわけ生活に興味を持つと考えられる、生活科学を専門に学ぶ学生とし、被験者を本学の生活文化学科生活文化専攻生とした。

有効回収率は、1年生94.6%(在学者56名中53名)、2年生96.3%(在学者54名中52名)、計95.5%(在学者110名中105名)である。

調査年月日は、平成29年6月12日と7月24日である。

結果及び考察

1. 小学校の家庭科

(1) 教科の興味深さ

「家庭科は興味深い科目であったか」との設問に関しては、「興味深かった」とするのは37.1%あり、反対に「興味深くなかった」とするものは14.3%である。これらから、「興味深かった」とするものの方が約2.5倍多いことがわかる。しかし、最も多い回答は、「どちらともいえない」とする回答であり、44.8%と半数近くを占める(図1)。

つぎに、回答理由を分析する。「興味深い教科であった」とする回答の中では、「教科が楽しかった」、「興味深かった」といった全体に関する理由は少ない。一方、「調理が楽しかった」、「好きであった」、「興味深かった」といった調理に関する回答が約半数を占め、次いで、「裁縫³⁾が楽しかった」、「好きであった」である。そのため、この二つの理由が大部分を占める。また、「初めてのことなので興味深かった」といった基礎を学ぶ小学校教育ならではの理由や、「役立つ」、「大人のしている事を学べた」といった現実生活に即する家庭科の特性を指摘する理由も少数みられた。

「興味深くなかった」とする中で、具体的な理由があげられていたのは半数で、かつ内容も、「家庭科教員との相性に関するもの」が複数あるが分散している。「裁縫・調理の内容に関心を持てなかった」や「魅力がわからなかった」、「必要と思っていなかった」等があげられている。

「どちらともいえない」とする回答では、「記憶に無い」や「無回答」が過半数を占め最も多い。具体的にあげられた理由では、肯定と否定が混在した側面があるものが多い。なかでも、「調理は好きだったが裁縫は苦手だった」、「調理は好きだっ

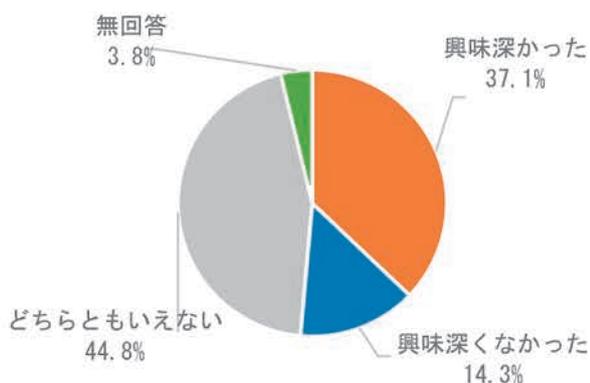


図1 小学校の家庭科の興味深さ

たが興味がないものがあつた」といった調理に興味を示すものが半数みられた。その他では、「裁縫は楽しかったが…」、「実習は楽しかったが講義はあまり楽しくなかった」、「関心ももてる内容と、もてない内容があつた」等がみられる。一方、否定的な側面をもつが興味がないとは言えないとする回答もある。「嫌と思ったことがある」、「あまり楽しかった記憶がない」等があげられる。その他に、「大体のことは家でも知っていた」といった学習意欲を抱きにくい理由も少数みられた。

教科を学ぶ上での最大の要素である「興味」に関しては、家庭科はかなり問題を抱えているといえる。しかし、実習は教科の魅力に直結し、児童の関心を引き付ける要因となっていることが明らかになった。また、教師の影響力が教科の興味を左右している事が把握された。

(2) 学んだ内容で興味のあつたもの

小学校の家庭科で学んだ具体的な内容で興味深かつたものを調べた。その結果、「布を用いた物の製作」(42.2%)が最も多く、つぎに、「調理」(36.3%)である。これらが大半を占めていることから、実習は興味深いことがうかがえる(図2)。なお、「布を用いた物の製作」の方が調理よりやや評価が高いのは、実習内容にも影響されていると推測される。教科書^{4),5)}で実習内容を確認すると、「布を用いた物の製作」では、手縫いの小物の製作(ペンケース、ティッシュケース、ペットボトルキャップの針刺し等)やミシンを使った製作(クッション、枕カバー等)がある。手作りであり、製作後使用できる喜びがあり、児童が興味を抱きやすい内容といえる。一方、「調理」では、「ご飯を炊く」、「みそ汁を作る」といった日常の基本食である主食と汁

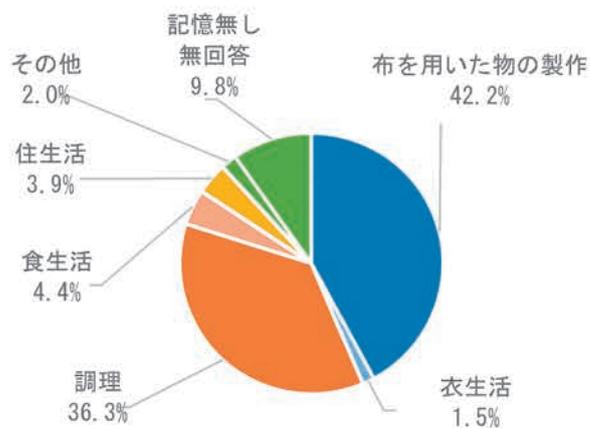


図2 小学校の家庭科で興味のあつた内容

物の調理から取り組む。さらに、「ゆで卵」や「青菜の炒め物」、「カラフルコンビネーションサラダ」、「野菜のベーコン巻き」といった主菜調理を学ぶ場合もあるが、豊富な主菜を食べ慣れている児童にとっては、比較的地味な食事であると考えられる。そのために、興味を抱くことや魅力を感じることは、「布を用いた物の製作」よりは少ないと推測される。

また、領域別に捉えると、衣の領域では、「布を用いた物の製作」に「衣生活」を含めると43.6%となり、食の領域も「調理」に「食生活」を含めると40.7%である。そのために、この二つで大部分を占め、他の領域を大きく上回っている。反対に衣、食と比べて少ないのは住であり、3.9%しかみられない。

(3) 住領域で記憶に残る内容

衣食住の中で興味が最も低い住に関係した授業内容の記憶を確認すると、「学んでいない」とするものも含め、86.5%の大多数が「記憶が無い」としている(表1)。

具体的に記述された回答数は111回答中13しかない。その中で、「通風換気」の内容が最も多い。次に、「掃除の方法」である。その他には、実習関係の「ダンボールや家にあるもので部屋の製作」や「家族構成や部屋の数、大きさ調査」である。また、「部屋の割り振り方」、「地域特有の住居のあり方」や「昔の住居」もあげられていた。

そのために、回答内容では実習や調査的なものもわずかにみられるが座学が主体であることがわかる。教科書^{4),5)}でも実習的な内容は見当たらない。

さらに、2冊の教科書^{4),5)}で衣食住の配分をページ数でとらえると、食に関係した内容が最も多く、次が大差なく衣関係であり、住に関係した内容はそれらの半数と少ないことがわかる(表2)。

そのために、住関係は教科書の配分に即して、実際の授業数も少ないと考えられる。

表1 住居関係で記憶に残る内容

通風換気	5	13 (11.7%)
掃除の方法	2	
ダンボールや家にあるもので部屋の製作	1	
家族構成や部屋の数、大きさ調査	1	
部屋の割り振り方	1	
地域特有の住居のあり方	1	
昔の住居	1	
人のいるところは暖かい	1	
記憶が無い	96 (86.5%)	
無回答	2 (1.8%)	
合計	111	

表2 教科書における衣食住のページ数

	衣	食	住
教科書A	37	39	18
教科書B	31.5	35	17

(4) 小学校で家庭科を学ぶ必要性

小学校で家庭科を学ぶ必要性に関しては、49.5%が「必要である」と考えている。「やや必要」(41.0%)も含めると9割が必要性を感じている。反対に「不必要」(1.0%)や「やや不必要」(2.9%)、「どちらともいえない」(5.7%)は少数である(図3)。

そのために、家庭科を学ぶ必要性を短大生は認識しているといえる。

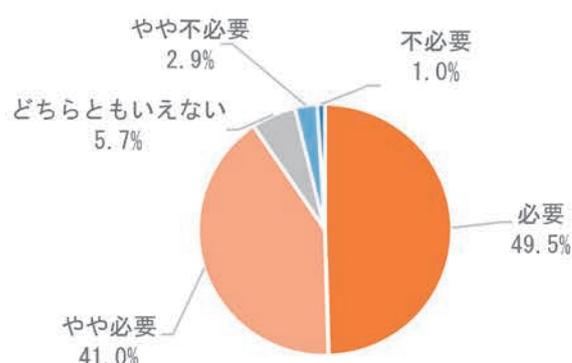


図3 小学校で家庭科を学ぶ必要性

2. 中学校の家庭科

(1) 教科の興味深さ

「中学校の家庭科は興味深い科目であったのか」の設問に対しては、「興味深かった」とするのは28.6%あり、反対に「興味深くなかった」とするものは15.2%である。これらから、「興味深い科目であった」とするものが約2倍多いことがわかる。一方、最も多い回答が、「どちらともいえない」であり、52.4%と過半数を占める(図4)。

具体的な理由としては、「興味深かった」の回答の約半数は、「調理実習が楽しかった」、「調理実習が好きであった」である。次いで、「裁縫が楽しかった」、「裁縫が好きであった」で、この二つの理由で大部分を占める。また、「役立つ」との現実生活への実用性に関する理由も少数みられた。

「興味深くなかった」とする理由では、「無回答」を含め具体的な回答がないものは過半数を占めている。一方、具体的に

あげられた理由は少数で、偏った傾向はみられない。「裁縫が嫌い」、「授業内容が面白くなかった」、「必要とは思えなかった」等があげられていた。

「どちらともいえない」とする理由では、「記憶に無い」が最も多く、つぎに、「無回答」で、具体的にあげられていた理由は半数と少ない。その中には、「実習は楽しかったが、講義はあまり楽しくなかった」という意見があり、とりわけ、調理実習を肯定する意見が4分の1を占め、「調理実習は楽しく、興味があるが、その他は…」等である。一方、布を用いた物の製作は、「楽しかった」という肯定的な意見と「苦労した、あまり好きではなかった」というやや否定的な意見がみられる。また、「授業内容が楽しくない」、「好きになれない」、「難しかった」等否定的な要素が強調されているものもある。教師に関係した、「よくわからなかった」、「好きでなかった」、「先生はおもしろかったが…」の意見も少数みられ、教師の影響も指摘されている。

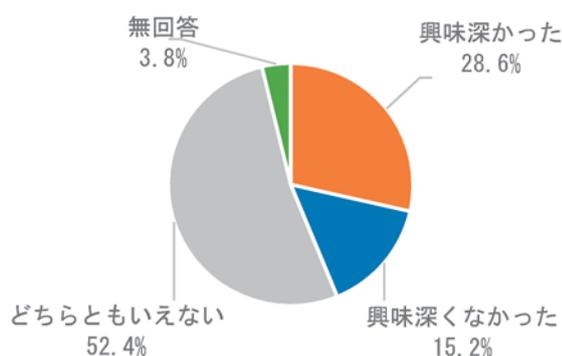


図4 中学校の家庭科の興味深さ

(2) 学んだ内容で興味のあったもの

中学校の家庭科で学んだ授業内容^{6),7)}で興味深かったものを改めて確認すると、「調理」(36.7%)が最も多く、「布を用いた物の製作」(26.5%)が続く。これら二つで過半数を占める。共に実習関係であり、実習に興味を抱いていることがわかる。

また、領域別にまとめてみると、食の領域は上述の調理実習に「食生活」も含めると 41.6%と半数近くを占め、次いで、衣の領域も実習に「衣生活」を含めると 32.5%になり、この2領域で大半を占める。「子どもの成長」の領域は4.8%みられが、住の領域は3.0%である。「子どもの成長」では、「幼児とのふれあい体験」、「子どもの遊び道具の製作」等の座学ではない内容があげられている(図5)。

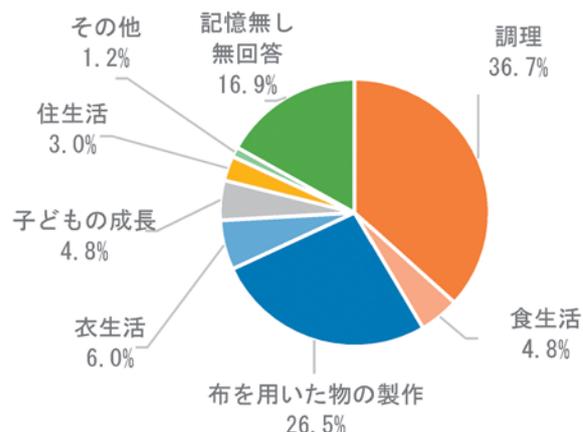


図5 中学校の家庭科で興味のあった内容

(3) 住関係で記憶に残る内容

住関係は、興味のあった内容では 3.0%と少なかったが、記憶に残る内容の有無では、「勉強していない」とするのも含め、87.0%が「記憶が無い」としている(表3)。

具体的に記憶に残る内容は 11.1%あるが、分散している。実習に関係した、「お菓子箱やダンボールなどで家の間取りや小物製作」、「チラシを使って間取りを考案」、「家のつくりをグループで調査・発表」や実用的な内容の「部屋の改善方法」、「子ども向けの家、家具を置く位置」、「子どもや高齢者が過ごしやすい住居」、「サザエさんの家の間取り」、「掃除方法」、「ハウスダストやシックハウス症候群」、「環境について」等があげられている。

表3 住関係で記憶に残る内容

お菓子箱やダンボールなどで家の間取りや小物製作	1	12 (11.1%)
チラシを使って間取りを考案	1	
家のつくりをグループで調査・発表	1	
部屋の改善方法	1	
子供向けの家、家具を置く位置	1	
子どもや高齢者が過ごしやすい住居	1	
サザエさんの家の間取り	1	
掃除方法	1	
ハウスダストやシックハウス症候群	1	
環境について	1	
昔と今の違い	1	
世界の住居	1	
記憶が無い	94 (87.0%)	
無回答	2 (1.9%)	
合計	108	

(4) 中学校で家庭科を学ぶ必要性

中学校で家庭科を学ぶ必要性に関しては、45.7%が「必要である」としている。「やや必要」(30.5%)も含めると8割が必要性を認識している。反対に「不必要」は1.9%で、

「やや不必要」は全くみられなかった。一方、「どちらともいえない」は21.9%みられる(図6)。

そのために、現在は家庭科を学ぶ必要性を大部分が認識していることがわかる。但し、必要性を判断できないとする意見が2割みられることに注目したい。

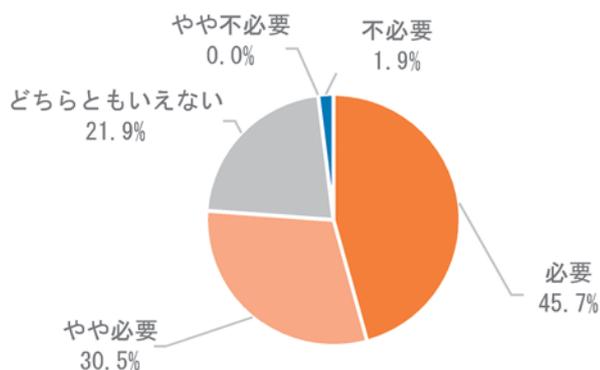


図6 中学校で家庭科を学ぶ必要性

3. 小学校の家庭科と中学校の家庭科の比較考察

(1) 教科の興味深さ

「家庭科は興味深い科目であったか」の設問に関して、小学校と中学校の回答数を比べると、中学校では「興味深かった」とするものは8.5%減少している。また、「興味深くなかった」とするものは0.9%増加している。最も多い「どちらともいえない」の回答も小学校より7.6%程増加している(図7)。

そのために、大差はないものの、総じて小学校より興味が減少していると考えられる。

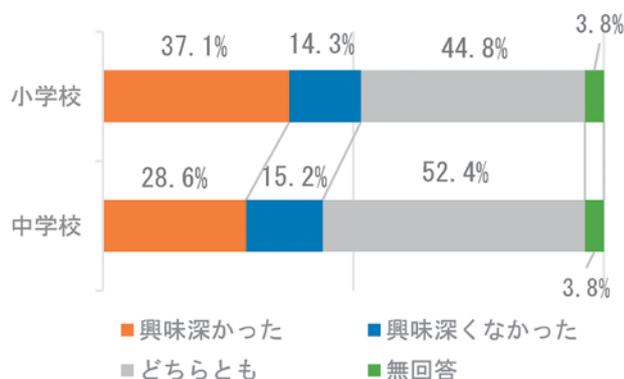


図7 家庭科の興味深さ

(2) 学んだ内容で興味のあったもの

興味のあった具体的な内容は、小学校では、「布を用いた物の製作」(42.2%)が最も多く、つぎに、「調理」(36.3%)であるが、中学校では、「調理」(36.7%)が最も多く、「布を用いた物の製作」26.5%)が次ぐ(図8)。

また、興味のあった内容は、小学校より中学校の方が1領域増加している。より広い範囲の内容を学習しているからであると考えられるが、中学校で新たに取りあげられた領域としては「子どもの成長」がある。この領域では、とりわけ、「子どものおもちゃ作り」が多く、その他に「幼児とのふれあい体験」があげられている。また、住関係は小学校では衣食に次いで3番目であったが、中学校では「子どもの成長」の次の4番目になり、さらに減少している。

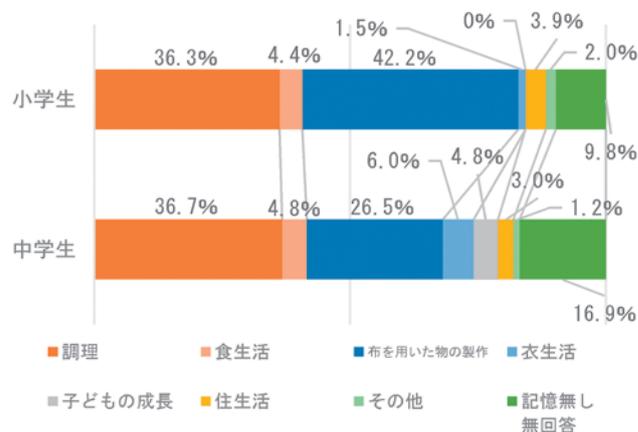


図8 家庭科で興味のあった内容

(3) 住領域で記憶に残る内容

住領域で学んだ内容で記憶に残るものは、小学校では「通風換気」が約4割を占めているが、中学校では実習的なものも含めて分散し、偏りは認められない(表1、表3)。

学ぶ内容は、「掃除」、「間取り」等は共通しているが、その他は共通の要素はない。

(4) 家庭科を学ぶ必要性

小学校、中学校共に家庭科に関する興味は比較的だったが、短大生になった現在は、教科としての必要性を強く認識している。とりわけ、小学校での必要性は9割と高い(図9)。中学校でやや減少しているのは、家庭科は主要科目のような受験には特に必要とされない科目であることも関係していると推測される。

また、義務教育期間中に興味が低かったのは生活実感の乏しい年代だったためであり、短大生になり生活力が身に付いてきたことで、家庭科に対する捉え方が変わり、学ぶ必要性を理解してきたと考えられる。

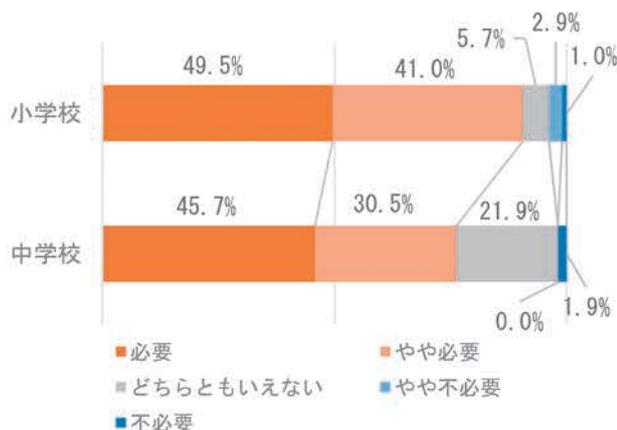


図9 家庭科を学ぶ必要性

まとめ

1. 家庭科に関する興味は、「どちらともいえない」とする回答が半数近くを占めるものの、「興味深かった」が「興味深くなかった」より1割から2割多い。これらのことから、興味を持つことができる可能性は十分あるといえる。
2. 学んだ内容で興味があつたのは、小・中学校共に「調理」と「布を用いた物の製作」が際立っている。そのために実習が座学より実用性も加わり、興味深い傾向にある。
座学も含め領域で捉えても、興味あるのは食と衣で大半を占める。衣食住の中で興味の少ないのは住である。中学校では子どもの成長の領域よりも少ない。記憶に残る内容も少なく、小学校では「通風換気」、「掃除」に偏りがみられるが中学校では際立った傾向はない。各領域の含量や授業時間数とも関係するが、住教育は義務教育ですでに興味や関心もたれていない事が把握された。
3. 教師の教え方や指導力だけでなく教師自身が興味をもっていることや、教師と児童・生徒の関係性が教科に関する興味に影響を及ぼしている。
4. 家庭科を学ぶ必要性は小学校では9割、中学校は8割と高く、大部分の短大生が強く認識している。
生活科学を専攻に学ぶ学生故に高い傾向にあるのか、あるいは女子学生故に意識が高いのか、今後、他の専門領

域の学生や男子学生の意識調査を実施する中で検証していきたい。

註および文献

- 1) 小学校学習指導要領解説 家庭編、文部科学省、pp.8-11、2008
中学校学習指導要領解説 技術・家庭編、文部科学省、pp.38-40、2008
- 2) 『信愛紀要』全号、『日本家政学会誌』の過去5年間の論文、『日本家庭科教育学会誌』の過去2年間の論文で検索したが、該当する論文は見いだせなかった。
なお、授業内容に関連した文献として、以下の論文がある。板倉明子:「家庭科教育」に関する授業の一考察—小学校・中学校・高等学校における「家庭科」の授業実践を基にして—、プール学院大学研究紀要 第53号、pp.217-237、2012
- 3) 学習指導要領や教科書では、「布を用いた物の製作」とし、「裁縫」という言葉は用いられていないが、ここでは学生の表記をそのまま用いる。
- 4) 渡邊彩子監修:文部科学省検定済教科書 小学校家庭科用 新編新しい家庭5・6、東京書籍株式会社、2016
- 5) 内野紀子他:文部科学省検定済教科書 小学校家庭科用 わたしたちの家庭科5・6、開隆堂出版株式会社、2016
- 6) 大竹美登利他:文部科学省検定済教科書 中学校技術・家庭科用 家庭分野、開隆堂出版株式会社、2016
- 7) 佐藤文子、金子佳代子他:文部科学省検定済教科書 中学校技術・家庭科用 新しい技術・家庭 家庭分野、東京書籍株式会社、2015